

佳作

別世界へ旅立った妹

具志堅澤

最愛のたった一人の妹が、一言も言い残さず「がん」で六十八年の短い生涯を閉じた。

あれから四カ月になろうというのに今日も涙は留めなく流れ落ちる。年老いた母や兄姉よりも先に逝ってしまった現実は、受け入れ難く、悲しみのどん底から抜け出せない。

誰もいないひっそりとした妹の家に入ると優しく微笑む遺影が私を迎え

る。

「今どこにいろの？お父さんは迎えに来てくれた？病室で仲良くなった牧志さんに会えた？」と矢継早に話しかける。病で出にくくなった小さなかすれ声が、聞こえるかもしれないと耳を澄ますが、期待は失望に変わる。

静寂の続く部屋で、一緒に病魔と闘った八年の歳月が、走馬燈のように頭を駆け巡る。

妹は、三〇歳の時に離婚し、三歳になったばかりの一人娘を引き取り、女手一つで立派に育て上げた。その娘も結婚し、ようやく、安堵が訪れるかという時に「がん」が発覚した。手術をしたが、既に進行していて手遅れだった。近くに住んでいながら、妹の体調の変化に気づいてあげられなかったことを悔み、罪悪感に苛まれた。苦労の連続だった妹に幸せになつて欲しいという願いは葬り去られ、なぜ、またも辛い試練を与えるのかとやり場のない怒りに悶々とした。

しかし、妹は愚痴や恨み事など一切言わずいつも平常心だったが、一度だけ泣き崩れたことがあった。医師から「がん」を告知されたときである。これからの辛い苦しい治療、予期不能な自分の将来と家族のことを思い重圧に耐えられなかったのだろう。号泣する妹に「必ず治るから、絶対に諦めないで一緒に頑張つて、乗り越えようね」と震える手を握りしめ、必ず治してみせる心で誓った。

手術から暫くして、国立がんセンターにセカンドオピニオンで診断を仰ぐため、娘と三人で上京した。別の治療方法がないか、一縷の望みを持つて臨んだが、朗報は得られなかった。これから先のことを思い、不安と恐怖が交錯し、絶望感に襲われた。

しかし、それからの妹は、「がん」であることに蓋をして、脳裏から取り去り、すべてを受け入れているかのように冷静だった。

吐気、倦怠感、発熱等のありとあらゆる副作用に襲われ、想像を絶する

苦しみを味わいながらも、弱音を吐かず、主治医も舌を巻くほどしぶとく耐えた。生きる希望を失わず、強い信念で治療に臨む姿は、病魔も近づけない気迫に満ちていて、感動さえ覚えた。

体調の良い日の面会は、とりとめのない世間話や、二人が共通して好きなスポーツの話題で盛り上がり、気を紛らわした。特に孫の話題になると満面の笑みがこぼれた。笑顔を横目で見ながら孫達が成人するまで生きて欲しい、せめて、後数年生きて欲しいと願い、それが叶うなら、私の命を分け与えたいと思った。

食欲がないと言えば、のど越しのよいゼリーやそうめんを、体調の良い日は栄養豊富な肝煎じ（ちむしんじ）等を作ってあげた。これが私に出来る細やかな支えだった。

「ネーネーが作ってくれたのが一番美味しいね。命薬（ぬちぐすい）さー」とおいしそうに口に運ぶのを見ると嬉しくて、心が解き放される気分だった。

た。他愛のない会話と面会の日々が、姉妹として、最も濃密で貴重な時間でもあった。

苦しい闘病生活が続く中にも嬉しいことや楽しいこともあった。一人娘に次々と子供が生まれ、三人の孫に恵まれた。孫の誕生日や保育園、学校行事等にはとても参加したかった。少しでも多く孫達を見ておきたいという強い思いは、主治医にも伝わり、その殆どは実現した。当り前の日常が妹にとっては奇跡に近いことだった。

闘病中に、幾度も死の危機に見舞われたが主治医の迅速な処置と妹の驚異の生命力で、まるで不死鳥のように回復した。辛そうな時は妹に隠れて泣き、回復した時は感涙した。

生きて欲しいとの切なる願いとは裏腹に、病は進行し、延命治療の決断を迫られる時が来た。苦渋の選択に、妹はじめ家族も悩み抜いた。最終的に妹の意思で、延命治療は施されなかったが、それが正しい選択だったの

か今でも答を見つけることが出来ないでいる。

妹がいない世界は、手足はもぎ取られ、心は引裂かれ、真つ暗な闇の世界である。

でも、妹と過ごした歳月に思いを馳せ、誇りを持ち、死別後の世界を前向きに生きて行こうと決意する。

長い闘病生活を目の当たりにして思うことは、死亡原因が一位になっている「がん」を根治する医療が早急に確立され、多くの尊い命が救われるよう願って止まない。

何億光年の遙か彼方の星で、妹が元気で過ごしているような気がして、空を見上げる。

「貴女は最後まで毅然としていて、本当に立派だったよ」と褒めてやりたい。